

氏名	小林 佐和子
ヨミガナ	コバヤシ サヲ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第440号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 着色磁器で表現するマジックリアリズムの世界 〈作品〉 彩艶くらべ

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	豊福 誠
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	島田 文雄
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	藤原 信幸

（論文内容の要旨）

本論文は、私の研究素材である着色磁器を、マジックリアリズムという精神的手段を独自に解釈し、その存在をより明確にしていくものである。

着色磁器とは、磁土に酸化金属などの高温でも発色する顔料を混ぜ込み、焼成した磁器である。私は東京藝術大学及び東京藝術大学大学院陶芸研究室で、着色磁器の研究に取り組んできた。私の着色磁器の研究はヴェネツィアン・ガラスのミッレフィオリを陶器で展開したいという思いから始まった。ミッレフィオリを陶器に置き換えたものを練り込み技法及び彩層技法と言う。この着色磁器にマジックリアリズムという現実と非現実を混淆させる思考を取り入れて立体作品を制作する。本論文ではその思考の発生源と過程と着色磁器の説明および具体的な制作工程を記す。

私が表現するマジックリアリズムとは、現実と非現実の混淆を狙うものである。生来、異質なものが混淆されて調和が保たれているものに興味を持つ性がある。それは対局にあるものでも隣り合うものでも良いのであるが、二つの世界感が出会った時に相乗効果で起こる化学変化のような驚きと魅力に感動することが多い。何かと何か混ぜあがって、世界の経済・文化・人類は発展してきた。異質が出会うことは人間の成長や発展という点において、これほどスピードを早めるものは無い。私も異質の混淆を具現化することによって、自らの精神的な成長を求めていきたい。そう思い、本論文の執筆に取りかかった。内面的な成長に、外からの刺激は必要不可欠なものであり、私自身、私以外のすべてのものの存在に助けられている。単体は単体で絶対的に存在しているものであり、単体の持つ美しさは普遍的なものであるが、見慣れているものの一部に異質が混淆する面白さを表現することは、芸術作品ならではの価値を増すものだと考える。そして、その行為は私自身にはとても自然なことである。

本論文は、私が表現したいマジックリアリズムの世界と着色磁器に主題を置き論考した。結論では、第一章から第三章までのまとめと、全体としての結論、自身の今後の展望について述べる。

第一章ではマジックリアリズムの説明と私が表現したいマジックリアリズムの世界について論じた。一言にマジックリアリズムと言っても様々な表現の可能性があるため、本論文で触れた具体例はほんの一部に過ぎないが、自身の作品の具体例を挙げて論じることで自らの好む傾向がより明確になったと感じる。自身の好むマジックリアリズムの手段とは、現実的な描写と非現実的な形態との混淆である。第二節で論考した擬人化はその代表例である。何かと何かの中間点を狙うような表現ではなく、それぞれの特徴をそのまま残した状態での混淆が、私の表現したいマジックリアリズムであると理解した。

第二章の着色磁器について論じた部分では、自身の原点とも言える着色磁器を表現する発想の始まりと、その技法について述べた。第二節で論じた練込技法と、第三節で述べた彩層技法は、それぞれに思い入れの

深い技法であり、技法の良い面と困難な面の特徴については今後の制作に活かすことができると考える。第四節で述べた着色磁器の造形的可能性は、現時点で私が考えられるものをすべて述べたが、今後の制作手段によっては、新しい造形的可能性が出てくることが期待できる。

第三章では、博士審査展の作品の製作意図と制作工程について記した。自身の作品の制作工程を写真をふまえて段階的に記す作業は、私自身初めて行った行為である。こうして制作工程を記すことで、制作の無駄な部分や変更すべき部分が浮き彫りになった。制作工程を文章としてまとめる作業は、自身の問題点を洗い直す意味で、とても有効であると感じた。

最後に全体のまとめと今後の展望について述べる。本論文を書き始めた目的として、自身の考えを整理するということが一番にあった。私は本論文に着手する前は、日々制作のみを繰り返してきて、自らの考えを整理するというを行ってこなかったのである。作りたい作品をただひたすら作り続けた結果として、技法に捕われ方向性を見失い、自身の作品を言葉で説明することが非常に困難になってきた。自身の思考の整理がつかないので、作品で主張したいことに迷いが表れ、完成した作品がなんとも曖昧な、主張の弱いものになってしまった。思考を一つの軸で回転させることができれば、作品の主張も作品自体も強くなると考えて、本論文に着手したのである。結果として、自身が興味のある対象を扱って論考を積み重ねる作業は、自身の考えをより明確にした。思考に優先順位をつけることで、今まで曖昧であった、作品で訴えたいことや表現したい事が見えてきたように感じる。

今後の展望としては、本論文を書くことでまとまってきた思考をもとに、技術的な問題点を解消できるように努力を重ねていきたいと考える。美しい作品は、制作者の意図が明白すぎると言ってもいいほど明白であり、そのため誰からみても分かりやすく、素直な共感を呼ぶ。そういった作品を作るために、思考を言葉で表現する作業は、より良い作品制作への第一歩であると考えている。今後も制作で行き詰まりを感じた時は、言葉でまとめるという手段を取り、解決に向かう手がかりにしていきたい。

#### (博士論文審査結果の要旨)

マジックリアリズムとは、現代文学に用いられる表現技法のことである。日本では安倍公房や村上春樹の小説に代表されるというが、研究者間でも定義については議論の余地があるところらしい。ただ現実世界をベースとしつつも、読者が説明なしに非現実の世界に放りこまれる表現という点ではおよその見解が一致している。いずれにせよマジックリアリズムのなかでは、現実と非現実は対立するものではなく、一元的な世界として混淆をとげていく。

ひるがえって現代陶芸の世界では、八木一夫による〈ザムザ氏の散歩〉の発表以来、オブジェか器（うつわ）か、あるいは伝統か革新かの二元論を熱く戦わせてきた。これに対して小林氏の論文は、この二元論をいとも軽やかに乗り越えて、「マジックリアリズム」を見出した点で特筆に値する。氏の定義する「マジックリアリズム」とは、美しいと感じる形のなかで現実と非現実が混淆するという独自の世界観である。現代文学におけるマジックリアリズムは共同体間の齟齬を核とするためか、一種の居心地の悪さがつきまとう表現でもあるが、氏の「マジックリアリズム」は実に満ち足りた、円融具足の姿をとっている。現実と非現実とのあわいでたゆたうかのような心地のよい世界観の発見は、二元論を超えた新たな陶芸の概念としても大きな意味をもつであろう。

そのほか第二章では、氏の独自の技法である「着色磁器」について、ミッレフィオリや練込などの発想の淵源が述べられており、興味深い記述となっている。ガラスから始まった氏の創作が陶磁器にたどりついた理由については、やわらかな質感や温かみに対する言及はあるが、さらに深まりのある議論がこれから望まれるところである。

以上のように思考過程を丁寧に言葉に置き換えつつ、将来的な陶芸分野の発展においてきわめて有用な概念を見出した同氏の論文は、博士学位にふさわしいものと判断した。

#### (作品審査結果の要旨)

小林佐和子の作品は擬人化やありそうであり得ないマジックリアリズムをコンセプトに制作した作品である。～水中の踊り～の作品群は金魚を題材に、尻尾は豪華な羽根毛飾りや天狗の団扇などをヒントに装飾している。イメージの湧き上がるまま制作していると言えよう。彼女は学部頃から練込による作品を作っていた。練込は難しい技法で、専門に打ち込む人間があまりいない。論文によってミッレフィオリと言うガラスの連続模様の作品を見た感動が彼女の原点であることが判った。ミッレフィオリとは俗に言う金太郎飴の作り方によって出来上がった連続模様をつなぎ合わせ造形するガラスの技法である。練込による細かな連続模様を構成させるが、練込粘土一粒が個々に収縮するので、接着状態が弱かったりすると乾燥中にひび割れが生じる。乾燥に細かな注意を要する技法である。彼女の卒業制作はひび割れとの戦いであり私も内心心配しながらアドバイスを与えてきた。大学院に入ると多くの学生が自分の作るもの、なにをよりどこに作るべきなのか悩み壁にぶち当たる事が多い。彼女も同様の悩みを抱えながら制作していたようである。この間にマジックリアリズムなどのコンセプトが芽生え、小林佐和子の世界が開けてきたようだ。練込技法は色調や組み合わせ方によって個人の感覚が表れやすい。作者の色感や構成力、表現力が直に表れ、精緻な作品や品格のある作品が生み出される技法であるといえる。様々な色粘土を作り、練込の色彩に変化を与えている。金魚の目を人間の目のように擬人化させ、水中のゆらゆらと揺れる尻尾を巧みに表現し、冠鳥の作品は彩泥の技法を中心にして輻輳挽きの上に紺や緑、赤などの泥漿を塗り重ね、その積層になった胴体の羽根や尻尾を一枚一枚削り出し彩色の変化を表現している。鮮やかな金魚に対し冠鳥は渋く、落ち着いた配色にまとめ「彩艶くらべ」の表題のごとく対比させ不思議なリアリスティックな雰囲気醸し出している。

マジックリアリズム的な発想から創造の世界が大きく広がり、自由な発想で作品づくりに打ち込めるようになったと言える。難度の高い練込技法と彩泥の色彩感覚、その造形性を調和させた「彩艶くらべ」の作品は小林佐和子の世界の出発点と言える作品群であり、完成度も高く博士授与に十分に値するものと判断する。

#### (総合審査結果の要旨)

小林佐和子の博士作品は、ヴェネツィアンガラスのミッレフィオリを陶芸技法で表現する事から始まった。ガラス技法のミッレフィオリを着色磁器による練り込み技法を用いて表現し、学部卒業制作で大皿の作品として展開した。陶磁器の練り込みは、着色した粘土を接合し文様化する技法であるが、素地作りに細心の注意と時間を要し、その際の油断が乾燥や焼成時の失敗に繋がる極めて難しい高度な技法である。修士課程では、さらにその技法研究を深め、自ら考案し名付けた彩層技法も加えた数多くの焼成試験を繰り返し、豊かな色彩感覚の作品へと展開していた。その研究成果を修了作品では精神性の高い壁面作品として発表した。修了制作にもその片鱗を伺う事ができるが、博士課程では理論構築に力を注ぎ研究を進めた。文学の表現技法に用いられるマジックリアリズムを陶磁器の立体表現に取り入れる試みを中心に制作と論考を進め、美しいと感じる形の中に混淆する現実と非現実を具現化した独自の世界観を構築して行った。マジックリアリズムを取り入れた作品制作の初期段階では、現実と非現実の相違が強く、その特異な形態に違和感を感じさせるものであった。しかし、論文の執筆が進み、マジックリアリズムの考察が深まるにつれ、作品における表現も完成度を増していった。二つの作品群からなる博士作品「彩艶くらべ」には、共に練り込み技法と採草技法を巧みに組み合わせ 金魚をモチーフとした「水中の踊り」では、磁器素地の白を基調に淡い色彩でまとめ、鳥をモチーフとした「空の宴」では、渋みのある強い色彩となっている。全体に和を意識した色調にまとめ、一点一点が表情豊かな作品として成立している。マジックリアリズムをコンセプトに独自の世界観を作品に表した優れた表現力と創造性に満ちた作品は、その裏付けとなる理論展開を示した論文と共に更なる展開を暗示する発表であり、これからの陶芸分野に一つの方向性を示すものとして博士学位に相応しいと判断する。